

# としょかんNEWS 第107号



2016年2月6日  
湘北短期大学図書館

## 読書ノートでポイントを集めよう！

湘北短期大学図書館では、みなさんが読んだ本についてメモをする習慣をつけることをオススメしています。そのために便利なのが「読書ノート」です。

この記録を続けていけば、自分が学生時代にどんな本を読んだか、その本から何を学んだか、どんなところに感動したか、振り返ることができます。また、レポートやゼミの参考文献リストとして活用しても便利！就職活動の際にエントリーシートや面接で自己PRするときにも役立ちます。ぜひチャレンジしてみてください。

### ● <読書ノート>をポイントに交換するには・・・

- ① 図書館で配布している<読書ノート>に読んだ本の感想を記入してください。
- ② 1シート(4冊/6冊)記入したら、カウンターで提示してください。  
4冊シートで80ポイント、6冊シートで120ポイント付与します。
- ③ 貯まったポイントは、1号館1階の引き換え機で各種チケットに交換できます。

### ● ポイントの対象になる本については、下の表で確認してください

対象	対象外
・文芸書 (児童文学・詩集・名言集を含む)	・マンガ ・雑誌 ・絵本 ・写真集
・実用書	・カタログ ・占いの本
・学術・専門書	・資格試験 ・図鑑/事典
・文庫	・料理の本 ・旅行ガイド
・新書	・手芸/工作/スタイルブック ・イラスト/キャラクターブック

### ● 第12回「読書ノート大賞」発表！

図書館に寄せられた読書ノートの中から優秀作品を決める「読書ノート大賞」を発表します！第12回「読書ノート大賞」は、2015年にご提出いただいた読書ノートが対象です。図書館による選考の結果、下記の作品が大賞に選ばれました。受賞者には図書カードが贈られます。また、参加者全員にさる一ちオリジナル卓上カレンダーをプレゼント！どうぞふるってご参加ください。

#### 第12回「読書ノート大賞」受賞作品

『女(わたし)を磨くマネー塾』 渋井真帆著

Cさん(14L)、おめでとうございます！



としよかんNEWSですので、まずは図書館の思い出を。はい、なんといっても受験勉強です。受験期には朝から晩まで図書館に入り浸っていました。思い出は以上です(汗)。もともと読書家ではありませんでしたので、本を借りるために図書館を利用したことはほとんどありませんでした。学生時代に大病を患ったお陰(?)で急激に読書をするようになったのですが、私は大事な所や気に入ったフレーズなどには容赦なく線を引いてしまいますし、また読書場所は専らいわゆる三上でいうところの馬上であり、すぐに汚れたり角が傷んだりしてしまうので、“図書館よりは古本屋”タイプです。他の思い出は…、浜田省吾さんの「放課後の図書館のロビーで思い切って声をかけた～」という歌詞でしょうか。図書館には、甘酸っぱい思い出が見え隠れしますよね。「本以外のなにが」も図書館の魅力のひとつ。司書さんの笑顔、静かな空気、冷たすぎる冷水器の水などなど…。

さて、そんな私が最近読んだ本の中で特に面白かったのは、京都大学総長・山極寿一氏の『父という余分なもの -サルに探る文明の起源-』(新潮文庫)で

す。“人とは。男女とは。親子とは。”が、ゴリラ研究の視点から大変解りやすく書かれており、気持ちのよいくらい腑に落ちる内容となっています。

「人類の家族を霊長類の集団と比較してみると、両者を分けるものは社会学的父親が存在するかしないかという違いであることがわかる。必ずしも生物的なつながりを必要としない父親という存在こそ、初期の人類が最初に考案した文化装置だったわけである。」  
「人間の社会はそもそも効率化を目指して組立てられたわけではない。むしろ、頭でっかちで成長の遅い子供をたっぷり時間をかけて育てるといって、効率化とは逆の方向で作られたのである。そこに人間の豊かさや幸福が宿る。」(あとがきより)

私の専門はダンスですので、動物園には結構よく行きますが、こうした観点からも動物を眺めてみますと、より一層面白さが増すとともに、こんな世の中だからこそ彼らから学び、「子どもにとって生きやすい世の中にしなくては！」と社会学的父親としての使命感を抱かざるを得ないのです。今年は申年ですし、もっと生活にサルを！！

## 【連載】館長閑話(28) 平和と友情よ永遠に

館長 野口 周一

2月3日、保育学科の実習巡回で二宮百合丘保育園を訪問した。相模線を出掛け茅ヶ崎で東海道線に乗り換えた。茅ヶ崎発は15時半ころ、湘南の海は西日に煌めいていた。『ブラリひょうたん』(創元社、1950年)で有名な高田保の「海のいろは日ざしで変る」という言葉を思い出した。彼の墓碑は大磯駅北側の坂田山の一角の高田公園にある。ここから湘南平まで相模湾を一望できる。

40年ほど前、私が大磯町に住んでいたころ、高木敏子さんの『ガラスのうさぎ』(金の星社、1977年)が出版された。高木さんは東京の墨田区から二宮町に疎開、そこで米軍機の機銃掃射を受けた体験を記録している。私には隣町の二宮町が舞台であり、イクメンとして奮闘中であつたことから、その当時の記憶が鮮明に思い出される。

現在、二宮駅南口にガラスのうさぎ像が建てられている(1981年)。説明文は「太平洋戦争終結直前の昭和二十年八月五日」と始まり、「ここ(国鉄)二宮駅周辺は艦載機P51の機銃掃射を受け 幾人かの尊い生命がその犠牲となりました/この時 目の前で父を失った十二歳の少女が その悲しみを乗り越え けなげに生き抜く姿を描いた戦争体験記「ガラスのうさぎ」は国民の心に深い感動を呼び起こし 戦争の悲惨さを強く印象づけました/この像は私たち二宮町民が 平和の尊さを後世に伝えるために また少女を優しく励

ました人たちの友情をたたえるために 多くの方々のご協力をいただき 建てたものです 少女が胸に抱えているのは 父の形見となったガラスのうさぎです」とあり、「ここに平和と友情よ永遠に」と結ばれている。

これも10年ほど前のこと、高木さんが「語り継ごう 東京大空襲～ガラスのうさぎ朗読&講演会」(2006年3月7日、於毎日ホール)で講演をされた。その一節に、「79年に青少年読書感想文全国コンクールで『ガラスのうさぎ』を読み、総理大臣賞を受賞した中学生の少女はその後、外務省に入省しました。私の本を読み、『平和の使徒となるべく戦争を起こさせない外務省職員になりたい』と思ったそうです。体の弱った人を一人でも多く助ける介護人になりたいとか、戦争後にもめている地域に助けに行ける人になりたい、という若者たちの手紙がいっぱい来っています。ああ、本を読んで、分かってくれているんだなと感じます」とある(『毎日新聞』2006年3月10日付)。

この若者たちは、いまどうしているのだろうか。私は間もなく定年退職となるが、どのような契機であれ、志をたてることの大切さをあらためて噛みしめている。

ガラスのうさぎ像 →  
(川原京子さん撮影)

